

きのこ歳時記 9

毒茸拾遺

今野 英山

この連載も茸の川柳に始まって、現代の茸の短歌まで一通り一巡した。しかしながら私の収集した茸の短詩形文芸は結構な量で、ごく一部のみしか紹介しきれしていない。そこで今回はテーマを絞って今まで取り上げていなかった茸の文芸（短詩形）を紹介することにした。

今回のテーマは「毒茸」。すでに今まで取り上げたものは省略する。

〔川柳〕

わらい茸家訓の裏に生えてくる (世相児)

この川柳は東葛川柳会の故今川乱魚会長から教えてもらった句である。毒茸と言ってもつい笑ってしまう笑いの句である。家訓と組み合わせたのが何ともおかしい。

悪知恵は心の闇の毒キノコ (牛肉巻き松茸)

これは笑えない川柳。心の闇に毒茸を抱えている人って怖い

ですね。美味しい茸と紛らわしのはなお怖い。「FMおかさき」の「川柳もどきコーナー」から拝借。

ハイキングコースで笑う毒キノコ (二宮茂男)

この毒茸はカエンタケのことだそうである。触れただけで火傷ならぬ皮膚障害を起こす茸なので決して素手で触れてはいけません。

食う人は美味いから食う毒キノコ (船山登)

そうです。美味いから食うのです。そしてひどく目に会つのです。美しい薔薇には棘があるように、花魁と遊んで身上を潰すように。

〔俳句〕

打杖に毒ある菌さくき哉 (加舎白雄)

信州上田藩士の家に生れた俳人。打杖とは、鬼や天狗や龍神などが、神通力などを使うために持つ杖のこと。これで毒茸を

打ち砕くという意味か？

じりじりじりがる朮や茸の毒 (飯田蛇笏)

ころがる朮とは山で切り出した木材のことだろうか。茸の毒にあたったように材がころころ転がり落ちていくというのか。木こりのことを朮という場合もあるが、木こりが茸の毒にあたって転がっていくとしたら結構シユールである。

毒茸かさのつてな溜水 (山口誓子)

「つてな」は漢字で書くと台である。広がった毒茸の傘の窪みに水が溜っているというのである。水が溜りそうな毒茸というと、ニセクロハツ、ドクササコ、ホテイシメジ、テングタケ・と枚挙にいとまがない。その溜り水はまさに毒をたたえているようにも見える

毒茸は毒々しきぞ潔き (相生垣瓜人)

相生垣瓜人は東京美術学校を出た俳人。高校の教員を退職後、隠遁塾居の半ば引きこもり状態の生活をしていたようだ。徹底して毒々しく生きたいと、自らの叶わぬ生き方なのか、やや自嘲気味な句に見える。

毒茸に嘖はれたれば打擲す (相生垣瓜人)

前句と同じ作者で、これは被害妄想的である。引きこもりの心境をよく表しているような気がする。

踏みつけて弾力ありし毒菌 (右城誓石)

われわれ菌類談話会の会員は、たとえ毒茸とはいえ決して踏



紅天狗茸

みつけたりはしないのではないかと。もっとも茸鎌で払いながら行くことはあるけれども。

毒茸の人の気配のうちにある (岸田稚魚)

なにやら人の気配がする。しかもその気配の中に毒茸のようなものがふくまれている、というのであろうか？

毒茸に佇ちたるゆえの風を負ふ (牧石剛明)

毒茸として、そこに立っているが故に吹く風を一身に受けている。自分の背負った運命とそれを受け入れて生きていく様を詠んだと見たが・

崩れつつ毒茸色をつくしけり (三嶋隆英)

傘が開いて、形も崩れつつある毒茸。それでもその艶やかな色彩は衰える様子がなく、最後の輝きを保っている。年老いても気丈で誇り高い老妓のようである。

毒茸の虚飾を蹴りて他愛なし (高萩篠生)

毒茸の艶やかな色を、単なる虚飾じゃないかと思つて蹴とばした。他愛のない、ちょっとしたことなだけで。

松茸の辺に悪びれず毒きのこ (田畑益弘)

松茸は茸の代表であり、言つてみれば血筋・家柄のいいエリートである。その傍にありながら、嫌われ者の毒茸が堂々と生えている。アウトローの心意気ここにあり、である。

笑ひ茸蹴とばし山が怖くなる (秋沢猛)

毒茸は打たれたり、踏まれたり、蹴とばされたりで結構災難に会うのだ。しかし、その恨みはちょっと怖いかもしれない。

笑ひ茸山気の渦をなせりけり (伊藤白潮)

千葉県出身。『ふなばし文芸』の選者。「山気の渦」とは山師のような気の渦を言うのであるうか？笑ひ茸の周りには「そんな雰囲気か渦巻いている」という解釈となつて面白いのだが。

ここ越えし翁のこゑの笑ひ茸 (森澄雄)

山越えの峠道であるうか。道端に生えている笑ひ茸を見て、かつてこの峠を越えた健脚のおじいさんを思い出した。陽気で元気な人だつたに違いない。

月夜茸光を育つ山毛櫨ぶなの闇 (国太郎)

月夜茸がまるで、夜のブナ林の中で光を育てているようだと詠んでいる。情景が浮かぶような句である。

戸を開けて音の出でゆく月夜茸 (桂信子)



月夜茸

深夜に何か出て行く物音がする。それはツキヨタケのもとに行くのだろう。ツキヨタケは何故かモノを引き寄せる力があるのだ。

月夜茸持てば女の身は細り (加藤秋邨)

ツキヨタケを女が持っている。何か空恐ろしい意図があるのだろう。その意図が自らの身を細らせている。

月夜茸光らねば雲魔のことし (加藤知世子)

月夜茸の光る夜は月が出て意外と明るいかもしれない。その月を隠す雲は黒々として魔界のもののように見えるといふのである。

〔短歌〕

縦木原深きをくぐりくれなるのあざやけき斑の茸を見たり (斎藤茂吉)

茂吉は茸に関する多くの歌を残しているが、毒茸を歌ったものは少ない。この歌でも直接毒茸として見ているのではなく、原生林の奥に鮮やかな斑のある赤い茸を見た、という歌であるが、何か秘密を見てしまったという印象を受ける。恐らくベニテングタケであろう。

毒茸の茎、あやししく白し街裏にふと見しをんなの頸にかも似つ (浅野豊子)

街裏に見た怪しく白い女の首。水商売の女性であろうか。鶴のようにすつきりした白い首だったのでないか。その首に似た茸と言えば、ドクツルタケということになる。

秋の山ゆくに愉しき毒茸の悪意は単純にして美しき (富小路禎子)

悪意を感じさせる単純さ。色は真赤か真っ白か、どちらかだろう。確かにベニテングタケにしてもドクツルタケにしても、そのわざとらしい毒々しさに特徴があるが、より不気味なのは白い茸のような気がする。とすれば単純にして美しいのはやはり赤い茸か。

みだらなるまつりのとき毒茸の千の袴きつゆのまに

消ゆ (福田栄一)

密集して袴めきあつていた毒茸が梅雨の間に消えてしまった、という歌。この頃このような形で出る毒茸と言えば、ニガクリタケ、ツブカラカサタケ、ツキヨタケなどが考えられるが、「千の袴めき」に相応しいのはやはりニガクリタケか。成長したニガクリタケが重なり合っている様は、妙に肉感的で淫らに見えないこともない。

夜の土に胞子を落とす毒茸の辺に來たれどもなほ遠きかな (前登志夫)

前登志夫は現代詩の詩作から出発し民俗学を研究した歌人。吉野山中の生家に定住し、晴耕雨読の生活をしていた。人の命を奪う毒茸の秘密に近づこうとしたけれど、核心からはまだまだ遠い。不思議な存在としての自然であり、その象徴としての毒茸ということなのだろうか。前登志夫の歌は難解である。



苦栗茸